

## 「子ろばが用意されていた」

2014年10月16日

マルコによる福音書 11章 1節～7節。一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどこいた。すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどこいてどうするのか」と言った。二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。

主イエスの一行は、エルサレムから2～3kmほどのベトファゲとベタニアまで来た。この時、二人の弟子を使いに出した。向こうの村に、誰も乗ったことのない子ろばが繋いである。綱をほどき、連れて来なさい。誰かに、なぜ、連れて行くのかと聞かれたたら、「主がお入り用なのです。すぐにお返しになります」と言いなさい。そう言えば、貸してくれる。主イエスはエルサレムに入る時、子ろばに乗って入ることを決めており、その手はずを整えていた。

ガリラヤの貧しい民衆は主イエスに深い尊敬と絶大な支持を寄せていた。ベトファゲとベタニアに近い村でも、好意を持って子ろばを用意してくれる人がいた。エルサレム神殿当局は、主イエスの命を狙っていたが、過越しの食事を準備してくれるエルサレムの住民がいた。惜しまず協力する心ある人々がいたということである。

弟子たちが村に行くと、言われた通り、表通りの戸口に子ろばが繋がれており、ほどこいて連れて行こうとすると、居合わせた人から、ほどこいてどうするのかと問われた。彼らは「主がお入り用なのです。すぐにお返しになります」と答えると、許してくれた。子ろばを連れてきて、その上に自分たちの服をかけた。主イエスはお乗りになった。このようにして、エルサレムに入る準備ができた。

子ろばに乗る主イエスから、自分もイエスさまをお乗せする「ちいろば」として奉仕したいと生涯を捧げた人々がいる。また「主がお入り用なのです」という言葉から、教会で奉仕を求められた時、率先して心を砕き、奉仕に当たる人々がいる。主イエスに自分を捧げる美しい出来事を生み出す御言葉として受け止められている。

主イエスは、なぜ子ろばに乗ってエルサレムに入ろうとされたのであろうか。当時、馬は全て、ローマに軍馬として徴用されていたので、馬には乗れなかった。しかし、主イエスは、もっと深い、旧約聖書の預言の成就として、子ろばに乗ったのである。それは、ゼカリヤ書 9章 9節、10節の御言葉である。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」

主イエスは、ゼカリヤの預言の成就として、子ろばに乗ってエルサレムに入られた。ここには、神の御心を成し遂げる深い思いが込められている。